

「固定資産」と「退院意欲の喚起」

神保康子

ライター&フォトグラファー

講義の中でもっとも印象的だったのは、社会契約論からの抜粋、
「ドレイは彼らの鎖のなかで 全てを失ってしまう
そこからのがれたいという欲望までも」
というものでした。

厚生労働省が7月14日に発表した「長期入院精神障害者の地域移行の方向性」の中で、「退院意欲の喚起」を目標としていることが、いかに間違っているか。それを、鋭く予言した言葉だと感じます。
Matto 映画にも、ハートネット TV の時男さんの番組にも共通するのは自由になってみてはじめて、
ああ、こんなに素晴らしいものだったんだと気づくことです。

6.26の集会で、心を打たれたのは、検討委員の25人中たった2人の当事者構成員の一人であった澤田優美子さんの言葉でした。

「病棟転換型居住施設は、『入るのは患者さんの選択なのだから、障害者の権利条約に反しない』という構成員がいた。しかし長期入院の方は自由な選択ができなくなっていると思う。

私もわずか1年の入院だったが、退院したいと言えなくなって、退院したいという思いすら失せてしまっていた。もし当時、病院敷地内に施設ができ、そこに入ることを勧められたら、断れなかったと思う。」

いったいぜんたい、退院意欲の喚起を、
患者を「固定資産」としている
精神科病院内でできるのか??

お話を聞いて、やはり無理ではないかという思いを強くしました。
大熊一夫さんの講義、迫力は変わらず、その後のおそばやさんまでも刺激的なやりとりを本当に感謝しております。
貴重なお時間をありがとうございました。